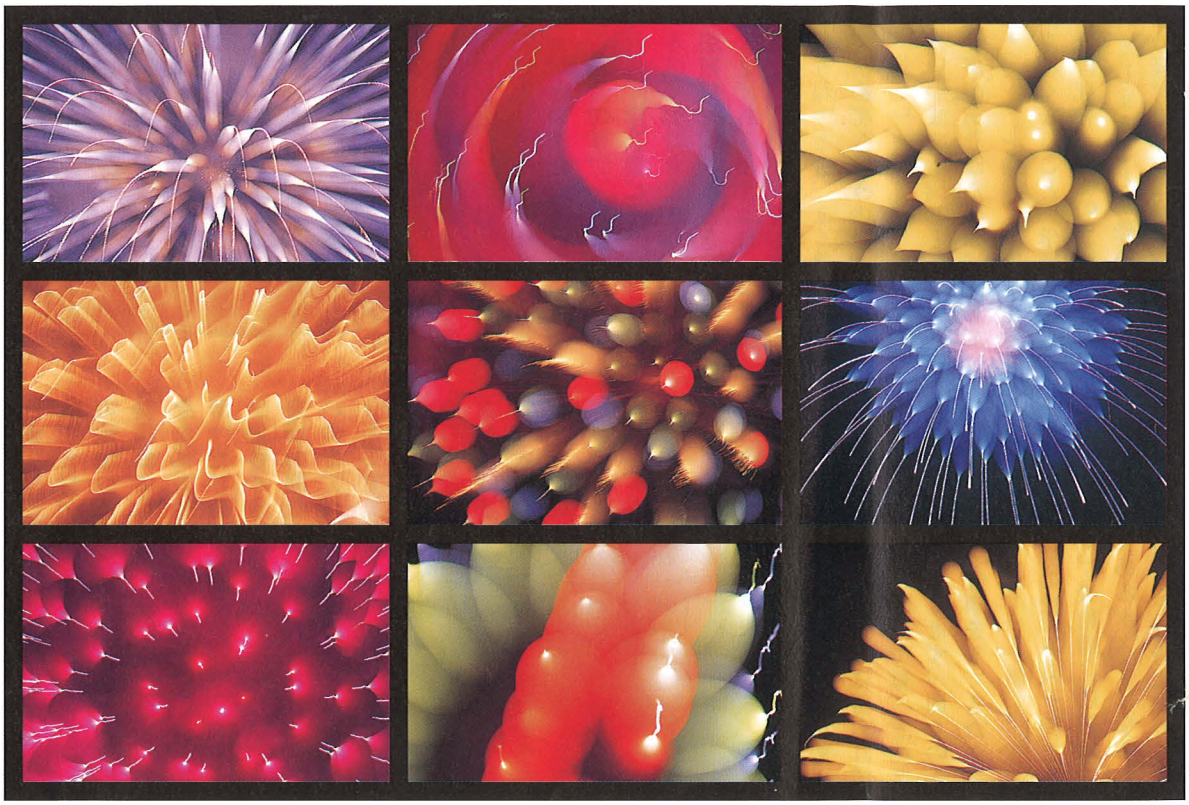
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2004年7月　NO.120



「夢幻 －MUGEN－」　門田卓也

〈もくじ〉

館長になってみて……篠　雅廣　2
文楽に恋して……吉田玉翔　3
「壊すこと」から「活かすこと」へ……竹村直也　4～5
高知サマージャズを開催するにあたって……岡野博史　6～7
ジャンベを通して見えてきたもの……葛目敏久　8～9
モザンビークの暮らし……新井孝彦　10～11
香北町立吉井勇記念館の在り方……鎭西三恵　12
かるぽーと初夏の事業のご報告……13
風俗歳時記・風伯……14～15

(財) 高知市文化振興事業団

館長になってみて……

篠　雅廣

この春より、高知県立美術館の館長になりました。

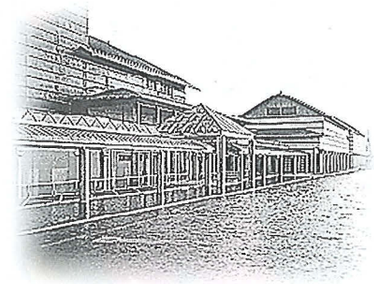
友人や知人、また新たに知遇を得たひとたちから、しきりに尋ねられるのは、「館長の椅子の座り心地は、いかがですか」ということですが、まぁ、これについては、どういう返答を期待されているのか、その場の状況や相手の立場、またお互いの親密さの度合いに合わせて、「空気」を読みながら適当に使い分けています。

しかしながら、端的に述べますと、このポストに就いたときから終始、ある種の「デジャ・ビュ」、そう、「既視感」のようなものがまとわりついて離れません。なんだか、もう十年も同じことをしているような気分なのです。それこそ、三年後の自分のあり方、そして五年後の身の処し方までわかってしまいます。

どうして、このように感じてしまうのか……ですが、これまでの、わたしの学芸員としての仕事の進め方や、美術館というものをどう考えてきたのか、といったことと大いに関係がありそうです。

わたしは、学芸員になって今年で足掛け十八年になりますが、この間、五つの美術館を、あるときは命ぜられるがまま、あるときは自分の意思で、「異動」しました。「会うたびに名刺が違うね」とも、よく言われます。すぐ辞めてしまうのは、生来の「飽きっぽい」性格のゆえですが、本当は、いつまでも同じところにいると、仕事のありかたが類型化して「煮詰まって」しまい、独創的な発想が出来なくなること、学芸員としての自分自身を、一種の「視野狭窄」に陥れてしまうことが恐いのです。美術館の経営母体が「お上」であろうが、「民間」であろうが、そういうことは気にしません。また、「この地域でないと……」とか、「この美術館でないと……」など考えたこともありません。「美術館という場所」だけをこよなく愛しています。

働きやすい環境というものは、誰かがお膳立てしてくれるわけではないので、周囲に働きかけ、説得して、自分自身で作り上げるしかありません。わたしは、そのように努力してきましたし、その意味では、どのようなときにも先走りせず、周りの人びとと協調して仕事をしてきたつもりです。



仕事というものは、なべて同じものでしょうが、美術館に居続けて、ある年齢や、あるポストになると、重要な選択や判断を瞬時に求められることがあります。その場合、わたしのレヴェルでは収まらない事柄については、「館長を傷つけない」かたちで、必ず複数の選択肢を提案することにより、大人の「落としどころ」を仰いできました。これまで、ほぼ十指に余る館長にお仕えしてきましたが、ある種の賢明なひとたちは、ご自身がどのように振る舞えば、組織が生き延び、そして自らの「権威」を保てるのか、わたしの前で身をもって示されました。

館長としての「社会的要請」、つまるところ、みんながわたしに、どのようなことを期待しているのか、については立場が変わっただけです。これからは、お仕えしてきた「賢明なひとたち」の判断のあり方を、そして、わたしなりに「学習」した成果をご披露したいと思います。

ここまで書いたら、「傲慢である」と憤るかたもいらっしゃるでしょうが、かつて在籍していた、ある美術館の館長から、「今は、君のヘリテージ（遺産）で生きている……」といわれたこともあります。

「大丈夫！」、わたしが頑張っているときは、その美術館は確実にグレードが上がります。

（しのまさひろ／高知県立美術館館長）

文楽に恋して

吉田玉翔

吉田玉男。その人が今年四月大阪日本橋の国立文楽劇場で演じた知盛。その悲劇性を含んだ人生のクライマックスを、あんなに物悲しく熱く、それでいて静かで清々しく演じられる人は、やはり彼をおいてほかにはいない。そうした声を多く聞きました。重要文化財保持者（人間国宝）吉田玉男。今年八十五歳になったその人の遣う人形に、かつて高校生だった僕も魅了され、虜になりました。

高知県土佐清水市で生まれ育ち、野球とプロレスが好きな、ごく普通の高校生だった僕は、ある夏、母に連れられて大阪に文楽を観に行きました。そのころから文楽が大好きだった母。それに対して、僕は全く興味がありませんでした。ただ、母に親孝行がしたい。そう思って、一緒に劇場へと向かうことにしたのです。

そこで、僕は人間以上に美しく、情深い人形に出会ってしまいました。僕は一瞬にして、恋に落ちたように魅了され、惹き付けられました。それを遣っていたのが、吉田玉男。その人だったのです。僕はすぐに文楽の世界に自分も入りたいと思いました。そして、幸運にも、僕が一目ぼれした人の弟子になることができました。申し遅れましたが、僕は今、吉田玉男師匠の下で、師匠のような人形遣いになりたいと修行をしている弟子の一人、人形遣い吉田玉翔と申します。

文楽は、昨年十一月にユネスコの世界無形文化遺産として宣言されました。その文楽で用いられる人形は、一体を三人で遣う、三人遣いという技法を用いており、世界でも類を見ないものと言われています。三人とは、頭と右手を持つ主遣い、左手を持つ左遣い、両足を持つ足遣いを指します。その文楽人形遣いの修行は、足十五年、左十五年といわれ、そうした長い修行を経て、ようやく主遣いになることができるのです。

僕は今、足遣いで修行している一人です。もちろん、黒衣を着ていて、普段の公演のほとんどでは、皆様に顔をお見せすることはありません。けれども、時には子役や端役、若手中心で催す勉強会などで、主役を持たせていただくこともあります。そうした時、僕は、師匠の遣う人形を頭の中で、何度もイメージし、自分のものにしようとします。いつかは、師匠のように。師匠に一歩でも近づきたい。そう強く思いながら、日々精進しています。

先にも申し上げましたが、僕は生まれも育ちも土佐清水です。その故郷高知県での公演が、少なくともこの十年間はありませんでした。文楽は、大阪を拠点にして、東京やその他地方でも公演を行っています。ですが残念なことに、その地方公演に高知は含まれていないのです。

そこで二年ほど前、僕は高知の人にも文楽に親しんでもらいたいと、知人などを集めて文楽の解説を行ったことがあります。そこで、来場した方々から、他の演目などいろいろと観てみたいとのうれしいお声をたくさんいただきました。その後、後援会の方々も後押ししてくださり、今回めでたくかるぽーとにて公演を行うことが決定いたしました。日程は八月二十一日のみですが、誠心誠意で人形を遣わせていただきます。また、今回は、文楽はもちろんのこと、昨年度芸術祭新人賞などを受賞された落語家桂かい枝さんの協賛を得て、落語と文楽のコラボレーションも考えております。ぜひ、一度、文楽の世界に触れてみてください。そしてこうした高知での公演が、今後も僕のライフワークとなり、大阪などで僕の師匠吉田玉男の遣う人形を観ていただくキッカケになればと、若輩者ながら思っております

（よしだたましょう／文楽人形遣い）

桂かい枝さん（左）と吉田玉翔（中央）

「壊すこと」から「活かすこと」へ

「高知遺産～失う前に、もう一度～」が伝えたかったこと

竹村　直也

私は、高知駅のすぐ北にある昭和町に生まれました。その後しばらく県外へ出て、中学入学と同時に戻ってきて初めて暮らした家は駅が一望できる北本町のマンションの九階でした。汽車が好きだった私は、出発する特急列車や入れ換えの機関車がせわしなく動く駅と機関区を毎日のように窓から眺めていました。

もう、そんな風景をその部屋から見ることはできません。いま、かつて油のにおいにまみれていた機関区は大きな更地と化し、新築された学校の校舎といくつかの真新しい家がその跡にそびえています。そして、駅だけでなく、その周辺はもろとも更地になっていこうとしています。駅の東側の、かつてお殿様が参勤交代の度に通った街道もすでに「道」としての機能を失い、アスファルトの剥がされるその日を待つだけです。数年後には、ここら一帯の何もかもが真新しい「ニュータウン」として再出発することになるのです。

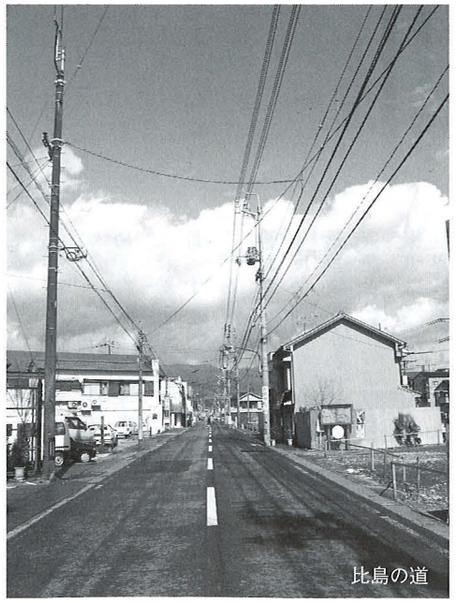
この界隈には、たくさんの思い出があります。たとえば高校時代、学校へ行くフリをして家を出て、学校とは逆方向のこのあたりへやってきては自転車でぶらぶらと時間をつぶしていました。大学時代には、京都からの帰省の度に入り組む路地や古い建物を探しにカメラを片手に歩きまわりました。水路沿いに赤々と咲き誇るカンナと鄙びた機関区のコントラスト、凝りに凝ったファサードの文化住宅。どうやら廃業して久しいアーケード付きの公設市場。どこへ辿り着くのか分からないような、細長い折れ曲がった路地。

この界隈には、なんともいえない懐かしさとあたたかさと、そして寂しさが混然となって残っていました。つい、最近まで。

■■■

いま、高知市内、高知県下の各地で、大小さまざまな「開発」が続けられています。利便性や安全性、生産性の確保・向上といったことを考えると、こうした開発は必要なものだとは思います。また、「時間の経過」には必ず何らかの「変化」が伴うものですし、そのことを繰り返していくのが人々の暮らす「町」の歴史そのものともいえる部分があるのも確かだからです。

しかし、これでいいのでしょうか？　思い出のいっぱい積もった場所、長い時間この町を見つめてきた建物が、毎日のようにどこかで消えていっているのに、私たちにはただそれを見送ることしかできません。そのかわりにできるのは、大きな道路やショッピングセンターなど、全国のどこの町へ行っても見られるようなものばかりです。


比島の道

しかし、そんな場所には「高知らしさ」はもちろんのこと、かつてその場所場所が持っていたはずのあたたかみはありません。開発をやめてほしいというのではありません。ただ、もう少しこの町のもつ「良さ」や「あたたかさ」、なにより「高知らしさ」ってどこから沸き立ってきているのか、そのことを考えてから開発することを考えることが大切なんじゃないか、そう思います。

■■■

この一月と五月、高知市のギャラリー「グラフィティ」で開催した『高知遺産～失う前に、もう一度～』は、こんな思いから企画された展覧会でした。そのコンセプトはいたって簡単、【この町を愛する一人の市民の目から、どうしたって『失いたくない場所』を記録しよう】ということだけです。参加者は第一回目が十人、第二回目が二〇人。メンバーは写真家や作家といったアート系の人材からコンサルタントや県庁マンなど地域づくりの現場と密接に関わる人たちまで、通常の展覧会に比べると多彩な顔ぶれが揃ったものとなりました。会場にはそれぞれの立場や考えから撮影した「遺産」の写真とその理由を記した一文が添えられて並べられ、会期中はピカソ展にはかなうはずもありませんがお年寄りから子ども、カップル連れから家族連れに至るまで、「グラフィティ」としても前例がない幅広い層からのお客さんをお迎えすることができました。

愛宕劇場

私たちが「高知遺産」で訴えようとしたことは、たくさんの人の「思い出」が積もっているような場所にこそ町の面白さや魅力、いわば「高知らしさ」が隠されているのではないかというところにありました。また、そんな場所が多ければ多いほど、暮らす人がこの町への「愛着」を感じることができるのではないかということ、逆にいえばそんな場所を失うことがいずれ町への「愛着」をかき消すことにつながっていくのではないかというところにありました。

■■■

風俗史学者の橋爪伸也氏は、ある講演で「ある出来事があった場所には何かの記憶が残り、それを次の世代に伝えていくことが大事だと思います。形をそのまま固定する。それは、伝統的な文化として大事だと思います」と語っています。また、別の著書では高度経済成長期とバブル期の建物が列をなして残る琵琶湖湖岸の風景を指して、古くさくなったものも新しくできたものも、いずれは琵琶湖を巡る経済史、文化史、風俗史の「いしぶみ」になると述べています。

その昔この場所は〇〇町といいましたとか、かつてここに誰それの寓居がありました・・・などなど、この町には「碑（いしぶみ）」がたくさんあります。だけど、残された建物や空間を「いしぶみ」として残すという感覚はあまりないように感じられます。「碑」と「いしぶみ」は、読み方こそ同じでも後世に伝えることのできる「価値」や「重み」の総量には雲泥の差があります。ただの文字やレプリカでは伝えきれない迫力が「いしぶみ」にはあるのです。

最近、京都では古い町屋を改装して暮らしはじめる若い人が増加してきているといいます。また、高松では錆び付いた倉庫をカフェや雑貨店に改造した「北浜アリー」が関西にまでとどろく人気を誇っています。よその町に目を向けると、「思い出」の積もった場所の価値を守りながら今の時代に合った活かし方を考えようという動きが活発になってきているのです。

一足遅れてやってきた建設ラッシュが静かに続くこの町にも、まだまだ素敵で楽しい場所がたくさん残されています。これからは、「壊すこと作ること」だけでなく、「守ること活かすこと」をまず初めに考えるべき時代がきているのではないのでしょうか。百六十の「高知遺産」は、そのことを静かに教えてくれるはずです。

■■■

おしまいに、「高知遺産」のこれからについて。この秋、第三回目の発表を「遺産」として選定された建物で行う準備を進めています。過去二回の発表分も含め、二百五十点余の高知遺産を展示する予定です。また、絶え間なく変化を続けるこの町の今を記録しておくために、「高知遺産」を一冊の本としてまとめようと編集作業も開始しています。こちらもこの秋の出版が目標です。出版の暁には、ぜひお買い求めください。

（たけむらなおや／「高知遺産プロジェクト」メンバー）

高知サマージャズを開催するにあたって

岡野　博史

ジャズのお祭りを開きます。七月二十五日（日）午後六時～十時、エルレロ、リング、タウン、木馬、ジャストフレンズ、パラダイムの六店で同時開催。一つの店で四ステージあり、一ステージ（一バンド）四十分、一バンドが場所を替えて二回演奏します。徳島、愛媛からゲストバンドも呼んで十二バンドの出演です。

さて、昨今各地でプロ・アマ問わずいろんなジャズフェスティバルが開かれ盛り上がっています。四国では歴史ある「徳島ジャズストリート」や、松山でも去年「おいでやジャズストリート２００３」が開かれました。実は高知でもここ数年、他県からゲストを迎えてライブを行ったり、また、よそから呼ばれてこちらから演奏しに行ったりしてきました。うれしいですね、楽旅するのは。高知サマージャズ実行委員会立ち上げの主旨の一つ、他県との交流はすでに始まっていたのです。

夏になれば高知じゃ〝ヨサコイ〟だけじゃなく、こんなジャズのお祭りしてるんだって情報発信できれば、本当にやりがいがありますね。

チケットは二ドリンク付きの二千円。一枚のチケットで全店出入り自由です。当日はできるだけ多くのライブスポットを訪ねてください。十二バンドの熱演を十分楽しんでほしいと思います。私も高知ラテンジャズファクトリーというバンドでギターを弾いています。盛り上がってください。応援してください。

今回このビッグイベントができるのも、長年高知のジャズミュージシャンに場所を提供してくださって、毎月ジャズライブを開催し温かく見守ってきてくれたエルレロの坂本さんはじめ、細かいアドバイスをいただいた愛媛のジャズフェス実行委員長の玉置さんなど、いろんな方々のご尽力があればこそだと痛感し、感謝しています。

七月になれば、高知のサマージャズだねって言われるよう、がんばっていきたいと思います。

（おかのひろし／高知サマージャズ実行委員長）

高知サマージャズ　出演バンド

石渡満雄とジャストフレンズ
EIJI TRIO
大川一平川ユニット
OHARA GROUP
カプリース　セクステット　プラス１
SOJA
高知ラテンジャズファクトリー
flat five
野口靖夫カルテット with フレンズ
フェイク　ジャズ　オーケストラ
～ゲスト～
太田純一郎　and　His　Friends（徳島）
Jazz　Paradise（愛媛）

ジャズと出会って42年

リトル・デーヴィス

私がジャズと出会って、もう四十二年になります。四十二年間もジャズと付き合っていると、いろんなことがあります。無論、嫌になったり、つまらなくなったりすることもありました。しかし、四十二年間常にジャズは私のそばにいたような気がしますし、またこれからも離れないだろうと推測します。

こんな私が、今年はとんでもなく素晴らしいよい年、感動の年になるだろうと実感しています。それは？と申しますと、この高知で、ジャズに興味を持ち、ジャズに感動し、ジャズを愛し、何らかの形でジャズと付き合っている方々が非常に多くいらっしゃることが分かり、そしてその方たちの現在の計画が、ひとつの大きなうねりを創り出そうとしている状況が目の前に広がっているからです。

申し遅れましたが、私は二十年前に転勤で高知へ来ました。仕事と家庭の狭間でのジャズだったので、個人的であり閉鎖的なものでした。好んでそうしたわけではなく、そうなってしまったのです。と同時に、各所でジャズと付き合っている方々も「個人的で閉鎖的」なのではないかと自分勝手に思っていました。

でも、フッと頭を上げて見渡すと、「そうじゃないぞー」、土佐弁で言うと「そりゃー違うろう」となりますが、そうなんです。ジャズは個人的なものでも閉鎖的なものでもなく、仲間で、集団で、みーんなで楽しむものです。そのことは、ジャズの歴史（発生）と発展が証明しています。そういえば、私もジャズに感動し始めのころは、常にその時々のジャズ仲間、ジャズ友がいて、盛り上がっていました。

いま、高知は、ジャズに対して非常に熱いです。いろんなところでジャズのイベントが計画されています。本気でジャズに取り組んでいらっしゃる方も、いっぱいいらっしゃいます。従って、ジャズを知らない方たちは、ジャズを知ることができる環境があり、また、ジャズに慣れ親しんでいらっしゃる方たちは、これを盛り上げようとする気運があるという、この好機を私は大切にしたいと思います。

単に、流行り廃りとか、ブームとかではなく、また、ノスタルジック色も極めて薄めに、いつまでも脈々と流れる大河のごとき現象としての盛り上がりを創っていきませんか？私は、多くのジャズ仲間を創り、ジャズを演奏し、ジャズを聴き、ジャズを語り、交流できればいいなと思っています。

（高知一のジャズファン）

リングでのライブ風景

ジャンベを通して見えてきたもの

葛目　敏久

近ごろ、ライブやお祭りなどのイベント会場へ出かけていくと多種多様な楽器を見かける。「民族楽器」とだけ呼ばれてきたそれらが今、固有名詞で認知されるようになってきた。その中でも、近ごろ注目されるものにジャンベがある。

ジャンベは西アフリカの太鼓で、丸太をくりぬいてワイングラス型に削り、片面だけにメス山羊の皮を張ったものだ。日本に入ってきだしたのは、およそ十五年ぐらい前である。

私は小さいころから太鼓全般に興味を持っていたが、身近に感じたのは三十歳手前になってからだった。二十九になってはじめて自分のジャンベを手に入れ、三十でジャンベづくりの職人になるために西アフリカ、マリ共和国へ渡った。そして、黒人種の血を継がぬ者として最初のイーリーグラナンとなった。イーリーグラナンとは、西アフリカの伝統工具や刃物を振るって丸太を削り、品物をつくる職人のことである。

イーリーグラナンは木を削る仕事しかやらない。ウス、キネ、イス、木槌等木製の日用品をつくるのが日常の仕事であり、楽器をつくる仕事は比較的少ない。それに、丸太を削って楽器の本体はつくっても、そこから先の、楽器を完成させる作業は行わない。私はマリのカンカバという村で修業をし、帰国するとき、イーリーグラナンの師アヴォダカレ・カンテから、その名を継いだ。

西アフリカには、ジャンベフォラ（ジャンベ演奏者）という職業もある。ジャンベフォラがジャンベ本体に山羊の皮を張って組み立てる。西アフリカでは何かあるたびにお祭りが行われ、ジャンベフォラが招集される。三百を超えるリズムの組み合わせにはそれぞれ意味があり、ジャンベフォラがお祭りに合わせてリズムを選び、演奏する。

ジャリという職業もある。西アフリカには独自の文字がない。無文字文化地域である。そのため、ジャリたちによって土地や家々の血脈が語り継がれてきた。ジャリは語り部であり、生き字引であり、神官であり、民生委員でもある。お祭りにはジャリも必ずよばれる。ジャリの言葉には力があると信じられている。お祭りのとき、ジャリは歌うように語り、叫ぶように歌い、周りの空気まで神聖なものに変えていく。

ジャリによると、ジャンベの歴史は十一世紀前から始まったとされている。

ジャンベづくりの職人になるため西アフリカを目指した私は、丸太削りの師以外にジャンベフォラの師も仰いだ。ジャンベフォラ、ムサ・ケイタ。その人が、私のもう一人の師となった。彼は、今までに数多くの演奏家を育て上げ、世界中へ送り出している。だが、当人自身は、マリの首都バマコに残ったままだ。「私はバマコが好きだ」と彼は言う。お金も少しあればいい、土地の者がその文化を守ることが大切だと言う。

師とのジャンベレッスンは楽しかったが、非常に厳しいものだった。二人のときはまだいいが、バンドアンサンブルのレッスンのときは、メンバーから外される日もあった。

現地でのお祭り。師の妹が双子の女の子を出産し、お祝いのお祭りが行われる日、師から演奏するように言われた。一九九九年十一月。それが、私のデビューになった。

太鼓やイスなどの西アフリカ伝統木工品

では、ジャンベのつくり方を紹介しよう。丸太を削った本体を入手し、布地屋でひもを買う。牧場などでメス山羊の皮を買ったら、洗濯用のたらいに水を張って五時間以上浸けておく。金物屋で鉄筋を入手してリング状のものを三つつくって溶接する。

本体の片面に皮を張り、リングで止め、水気の残ったままで毛剃りを済ませる。数日間かけて完全に乾燥させたら、ひもでカンカンに引っ張って調音すると完成だ。

丸太から完成まで、寝かせる時間も含め三か月ほどであるが、楽器として安定期を迎えるのは三年以上後のことになる。それゆえ、西アフリカの打楽器は「持ち主が育てるもの」と言われる。時を重ね、数枚の皮を張り替えていくうちに、音も、そして持ち主の手も磨かれていく。

丸太からワイングラス型にジャンベを削り出していく。後方で、上からつるしているのが完成したジャンベ

私の現在の仕事は、楽器をはじめとした西アフリカ伝統木工品の製造・修理・販売の自営業ということになる。それに伴い、その文化推奨のため、無報酬で演奏指導を行ったり、現地の料理を伝えたりしている。

今までに、学校、病院、保育所、養護施設をはじめ、イベントライブやレクチャー等々にお招きいただいた。そういったとき、常に言い続けてきたことがある。

それは、ゴミ箱の中からも楽器の材料は選べるということ。たとえば、スーパーのビニール袋を丸めて手に持ち、擦り合わせて拍子をとる。また、木板に割り箸を並べて貼り付け、束ねた割り箸と擦り合わせると、グィロという楽器と同じ使い方で楽しめる。フィルムケースのような容器に砂を入れて振ってみてもいい。

アフリカから連れ去られた人々は、何かあるごとに歌い、踊り、音を鳴らした。自分たちの生まれた場所から持ってきた文化だ。

やがて楽器を取り上げられた彼らは、木箱を打ち始めた。その箱は、時を重ねペルーでカホンと呼ばれ、さらにスペインへ渡った。フラメンコギタリストたちはギターを打ち鳴らしてダンサーを煽り立てていたが、カホンを使うようになってから、その迫力を増した。美しく悲しく人の心を揺さぶるフラメンコのリズムだ。

西アフリカのリズムは音楽用語的にいうと、八分の六拍子が多いが、その組み合わせにより形を多様なものにしている。

リズム。これを語りだすと尽きない。演奏指導をしながらいつも言うことだが、リズムを出そうとしているときはリズムにならない。リズムが癖になるまで叩き込んで、そこからが始まり。

昨年は、各地のイベントやコンサートに参加し、これまで交流を深めてきた演奏家や指導者たちと少なからぬ昼夜をともにした。そして私もようやくリズムの勉強を始めることができると心強く思った。

今年に入っての二度の長い旅の中でも多くの出会いや再会があり、うれしい出来事にも恵まれた。それは、天狗高原の天狗とも言われる初老のギター弾きと偶然再会し、彼がギターを奏で歌ったときだった。リズムの内にあるメロディー、メロディーの内にあるリズム。それが私の心の中の奥深くに入り込んでくるのを感じた。私も、演奏者としての道の一歩目が見えてきたかと思った。

最後に一つ。「音楽」がスピーカーから耳に入ってくるものとして認識されている現代にこそ、生の楽器の音を聴く喜びを感じたい。感じてほしい。人の居場所があらゆる良いもので満たされることを願って。

（くずめとしひさ／ＤＪＥＭＢＥ）

カンテ「葛目屋」主人

※ジャンベを体験してみたい方は、毎週日曜日18：00～21：00に横浜のヘリオス（特別養護老人ホーム森の里高知）大ホールを借りて練習をしていますので、のぞいてみてください。

モザンビークの暮らし

新井孝彦

キリマネから漁村へ向かう途中で

アフリカまで22年

「アフリカの夢」という歌があります。学生時代に初めて聴いた時には感動して「俺もいつかはアフリカへ」と思いましたが、時間とともに歌も忘れ、憧れも薄れていました。

それから二十二年たった平成十二年、アフリカのモザンビークに行くチャンスが突然やって来ました。

日本の水産会社は同国の二百カイリ経済水域内でマグロやエビを獲らせてもらっています。そのお礼に海外漁業協力財団（海外で事業を行う日本の水産会社を援助する組織で水産庁の外郭団体）が水産加工の専門家を派遣し、零細漁業者に技術的支援をすることになりました。そして、同財団に加工技術者として登録していた私に声がかかったのです。

当時、私は東京築地のかまぼこ会社で働いていましたが、アフリカに行けるとあって後先考えずにひきうけました。モザンビークのことなど何も知らずに。あとから調べてみて、「聞いたことがある」と思ったのが唯一「ザンベジ河」でした。その河が流れるザンベジア州で過ごした三年間の生活についてご紹介します。

アフリカ大陸の南の端は南アフリカ共和国ですが、その北隣の東側がモザンビークです。日本からは飛行機で香港、ヨハネスブルグを経由して首都のマプートまで約二十時間、任地のキリマネはザンベジア州の州都で、マプートからさらに千二百キロも北にあります。

キリマネの暮らし

気候はというと、一月、二月は雨が多く蒸し暑いのですが、高知の梅雨よりは過ごしやすいです。四月から十月までは湿気も少なくて涼しく、日本で言えばちょうど秋の中ごろのようで非常に快適です。

モザンビーク料理は日本人の好みに合い、ザンベジア州は特に鶏料理が有名です。今までそこら辺を走り回っていた鶏を絞めてココナッツミルクとニンニクをたっぷり使って料理します。しかし、キリマネには日本料理屋はもちろん、中華料理屋もありませんので、時々、日本食への渇望を感じました。

一年のうちひと月だけ、キリマネは果物で溢れます。十二月がマンゴ、ライチ、パイナップルの収穫期なのです。中でもパイナップルは世界一と言われます。「そんな大げさな」と言いながら、食べたあとは誰もが例外なく「そのとおり」と納得するほどの美味さでした。

モザンビーク人恐るべし、と感じることがありました。例えば言葉。現地語とポルトガル語を話すのが普通で、私と一緒に働いたピメンテル氏（高知県工業技術センターで水産加工の研修を受けさせてもらいました）はポルトガル語、スペイン語、さらに三種類の現地語を話すことができます。田舎の漁業者の中にもポルトガル語と現地語のほかに世界で最も難しい言語と言われるアラビア語を読み書きできる人がいるのです。

漁村に行くと子どもがよく親の手伝いをしているのを見かけます。四歳ぐらいの子どもが自分の体の半分以上もあるような弟や妹を背負って面倒を見ていたり、井戸の水をくみに行ったり、地引網からこぼれた魚を拾ったりしているのです。

私が働いていた小規模漁業開発研究所ザンベジア支局の職員のほとんどが夜間学校に通っていました。給料の額は学歴に順ずる、ということもあるとは思いますが、一日働いた後、夜四時間学校で勉強しようという姿勢には頭が下がります。

食品を衛生的に製造する目的は食中毒を防止するためですが、一方、多少のことでは具合が悪くならない頑健な胃腸を持つということも非常に大切であると感じるようになりました。井戸水を直接飲んでも何ともない人に比べて、沸かさなければ飲めない我々日本人は劣っていることになるのではないでしょうか。

もちろん、モザンビークの人々にも欠点は多々ありますが、ここでは省略します。

マラリアとコレラ

キリマネは伝染病の展覧会のような所です。マラリア、コレラ、狂犬病、肝炎、エイズ、象皮病、眠り病などなど、さらに砂地には砂蚤、淡水には住血吸虫がひそんでいます。

ここのマラリアはほとんどが熱帯熱マラリアで、治療が遅れると意識障害、腎不全などを起こし、死亡にいたります。私は着任当初、この病気にかかりました。幸い手当てが早かったため、二日間寝込んだだけですみましたが、気持ちの悪さ、倦怠感、頭痛は耐えがたいものでした。「マラリアか?」という症状を感じたので、州立病院の検査室で血液検査をし、医師らしき人に処方箋を書いてもらい三種類の薬（マラリア特効薬、痛み止め、抗生物質）を飲みました。その直後、頭が部屋いっぱいに広がるような幻覚症状が現れ、吐いてしまいました。

さて、そこで、命をかけた決断をしなければなりませんでした。吐くまでに薬がどの程度体に吸収されているかが問題です。もし、全部吸収されているのにもう一度薬を飲めば、副作用が強い（失明の恐れもある）マラリアの薬を二倍飲むことになります。まったく吸収されてないのに、もう一度薬を飲まなかったら、マラリアが進行し死んでしまう、という訳です。さらに薬局で薬について尋ねたところ、私が処方してもらった抗生物質はマラリア薬と絶対組み合わせて飲んではいけないものだと言うではありませんか。あの時は結局、マラリア薬だけをもう一度飲んで、全快にいたりましたが、以後、「頼れるのは自分だけ、病院なぞまったくあてにならない」と思っていました。

雨季にはコレラが流行り、町外れには隔離病棟が設置されます。知り合いの左官屋の奥さんは二度も罹りました。隔離病棟へ患者を運んで行くと、「死なせたいのなら、置いていってもよい」と言われて追い返されただとか、ひと月の間に百人死んだとか、いろいろな噂が流れていました。その時期、キリマネで安心できるレストランはたった二軒になってしまいます。しかし、コレラは自宅できちんと料理したものだけを食べていれば対抗できるし、罹っても脱水症状にならぬよう水分をとりながら薬を飲めば治ると認識していましたので、あまり防ぎようのないマラリアより怖くありませんでした。

私の仕事

ザンベジア州の零細漁業者が住む漁村には電気も水道も来ていません。そんなところでの水産加工は塩干魚を作ることくらいです。ところが彼らには塩を買うお金さえままならないので、出来る干物は塩不足で品質劣悪、日本であったらとても食用にならないものでした。そこで、漁業者自らが海水から塩を作る方法（塩田の造成、経営）と高品質の干物の作り方を指導するため、未舗装のザンベジア州内を四輪駆動のトラックで走り回っていました。

もう一度キリマネに

帰国して一年以上が過ぎてすっかり日本の生活に慣れた今、もし「もう一度キリマネで生活する気はありますか」ときかれたら、「はい」と返事をします。いろいろあったけれども、キリマネは良いところでした。

（あらいたかひこ／水産練り製品製造販売「おと丸」店主）

学芸員シリーズ⑤

香北町立吉井勇記念館の在り方

ー事実は正しく・うたは自由にー

鎮西　三恵

香北町立吉井勇記念館は、平成十五年五月三十一日、吉井勇の事績を正しく後世に伝えるとともに、勇を中心に上代～現代の詩歌を研究する施設として開館しました。

さて、事績を正しく伝えるということは、文学館の運営だけでなく、何事においても、とても大事なことです。やはり、近・現代の文人の場合、作品から受けるイメージや、それ以上に、そこから膨らむ噂話が蔓延していることが多くあります。それ故、事実を見つめ、そこから導き出した真実を伝える、そういうデータを取り出せる施設となるように努めています。それには地道な調査・研究が必要ですが、この作業こそが、展示やイベントなど、館の事業の根幹を支える大切なものになります。

当館の名誉館長は勇の長男吉井滋氏です。勇の祖父は薩摩藩の吉井幸輔。坂本龍馬とも親交があり、土佐を訪れたこともあります。勇を「オヤジ」と呼ばれる滋さんは、後楽園の支配人も勤められた野球人で、野球王国の高知を、勇と同じく第二の故郷のように大切に思ってくださり、吉井家と土佐は深いかかわりがあります。その滋さんや、勇と勇の作品を愛する全国の心ある方から寄贈された遺品・写真・直筆作品などの貴重な資料を活用しながら、事績を後世に正しく伝えていくことは、当館の最も大切な役割です。ファンも、初めて勇を知る方も、研究者も、はじめに吉井勇があって、最後にはやはり吉井勇に帰結するのですから。

当館では、企画展を一～二回と季節ごとにテーマを決めたミニ企画展を行います。常設展示はないので、一～二カ月おきに違うテーマの展示をしています。また毎年、吉井勇顕彰短歌大会を開催しています。その他、昨年は、開館記念講演会や七夕歌会、教育セミナーなども開催しました。今年からは新企画として「吉井勇とその時代」というテーマで学習会・講演会を開催します。また、勇のうたの題材になった民俗や、歴史に触れる機会を設けようと、七月七日～八月七日に香北町の昔の七夕飾りを再現し、投稿作品を展示します。八月には、季節の花を題材にした朝顔風鈴展など、目で見て、体験する企画も開催していきます。等しく、広く、正しく、そして親しみやすくがモットーの館ですので、お気軽にご来館ください。前もって連絡をいただけましたら、展示案内もしていますので気軽にご相談ください。

文学というと敷居が高く、堅苦しいというイメージがあるのではないでしょうか。口数の少なかった勇は、短歌だけでなくドラマの脚本や都踊りの作詞などもしています。創作の世界ですが、心情を吐露することのできる手段をもっていたからこそ、心身ともに弱り果てていても、生き直すことができたのでしょう。隠棲後の作品は日記のように分かりやすく、私たちからは感情移入しやすいものに変化しています。特にうたは形式があるからこそ、逆に自由な発想で自己表現ができます。自分の気持ちを文章化したり、他人の文章を読んで共感したりしながら、自分を客観視することによって、自分がよく見えるようになることは多いものです。一人称であえて語らなくても、つくり手の感情が気軽に伝えられるところが、うたや、文学の魅力ではないかと思います。

昨年の第１回吉井勇顕彰短歌大会

勇の真実と、フィクションの中に秘められた本音（?）を通して、自己表現の方法を学ぶ機会を設けていきたいと考え、うたの普及にも力を入れています。今年も吉井勇顕彰短歌大会を開催しますのでふるってご応募ください。当館の主人公は、利用してくださる皆さんなのですから。

（ちんぜいみえ／香北町立吉井勇記念館主任学芸員）

高知市文化プラザ かるぽーと

初夏の事業のご報告

◆高知のアーティスト2004 フェイク・ジャズ・オーケストラ

今年度から、地元高知で活躍しているアーティストを紹介していこうと始めたシリーズプログラム「高知のアーティスト２００４」。その第一弾として、五月七日、「フェイク・ジャズ・オーケストラ」コンサートを小ホールで開催しました。

「フェイク・ジャズ・オーケストラ」は、安芸市を拠点に二十年以上にわたって活動を続けている県内屈指のビッグバンド。今回は、スペシャルゲストとして、「フェイク」とのつながりも深い、日本でも指折りのトランペッター、エリック宮城さんが登場。テイク・ジ・Aトレイン、イン・ザ・ムード、スターダストなど、スタンダードジャズの名曲を中心とした熱いステージを繰り広げ、満員の客席も熱気に包まれました。

◆わいわい！子ども音楽会

「小さな子どもがいると、コンサートにもなかなか行けない」という声や、「子どもに生の音楽を聴かせたい」、「家族みんなで音楽を楽しみたい」といったご要望にお応えしようと、子ども向け、家族向けの音楽鑑賞プログラム「わいわい！子ども音楽会」を六月五日、大ホールで開催しました。

会場は、赤ちゃんから小学生までを中心とした小さな子どもたちと、お母さんやお父さんたちでいっぱい。鏡野吹奏楽団の演奏で、ディズニー・メドレーや童謡メドレー、アンパンマンやドラえもんといったアニメソング、大きな古時計など、子どもたちの大好きな曲の数々を楽しみました。

また、「指揮者にチャレンジ」のコーナーでは、客席から二人の子どもがステージに上がり、初めてとは思えない立派な指揮者ぶりを披露。観客から拍手喝采を受けました。

小さな子どもたちも一時間半のプログラムに飽きることなく、ときには大きな声で歌ったり、踊ったりしながら、生の音楽を存分に楽しんでいました。

◆市民の美術の広場「第56回高知市展」

アンデパンダン（公募・無審査）で、誰でも気軽に出品できる「市民の美術の広場」として親しまれている高知市展を、六月五日～二十日、市民ギャラリーで開催しました

今年も、年齢もキャリアも違う六百十二名の作家が、十ジャンルに七百五十一点の作品を出品。中でも、先端美術には昨年の倍の数の作品が寄せられ、また、陶芸・工芸には保育園・小学生の作品が参考出品されて、鑑賞に訪れた人々は一味違った感性を楽しんでいました。

また、北海道北見市からは美術交流作品二十九点が寄せられ、中日にあたる十二日～十四日には文化交流団四名が来高。作品鑑賞・美術体感イベントに参加し、作家同士の交流を深めました。

かるぽーと開館の年にはじまり、いまや市展の目玉となっている参加・体験型の美術体感イベント「あなたダビンチ、ぼくピカソ」は今年で三回目。晴天に恵まれた六月十三日、前広場に設置された野外テントや絵画室、工芸室に用意された十のブースで、約千人の小・中学生、親子連れが、うちわに絵を描いたり、万華鏡を作ったりとさまざまな体験を楽しみました。

発表と鑑賞の場の提供として半世紀以上続いてきた高知市展は、子どもたちを巻き込みながら、美術の楽しさをさらに多くの市民に広げる事業となっています。

万華鏡上手にできたかな

ぼく ピカソ？

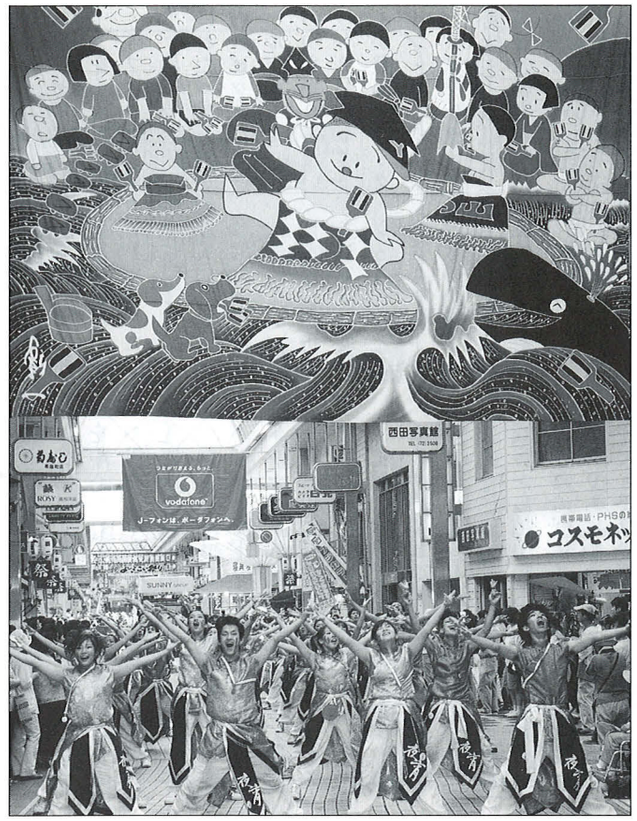
高知を撮る

第20回写真コンテスト入賞作品

喝采

（平成15年　高知市）

西内邦彦



よさこい踊りも横山隆一さんを讃えているようでした。

雄は要らないの？

風俗歳時記

かつて、「ネコ要らず」という名の殺鼠剤があった。黄リンを主成分とする劇薬で、この薬のお蔭でネコが失業するので、この名がつけられた。最近のネコはペットの餌を食べて堕落しているので、ネズミを取るどころか、ネズミを見ると身震いするという。

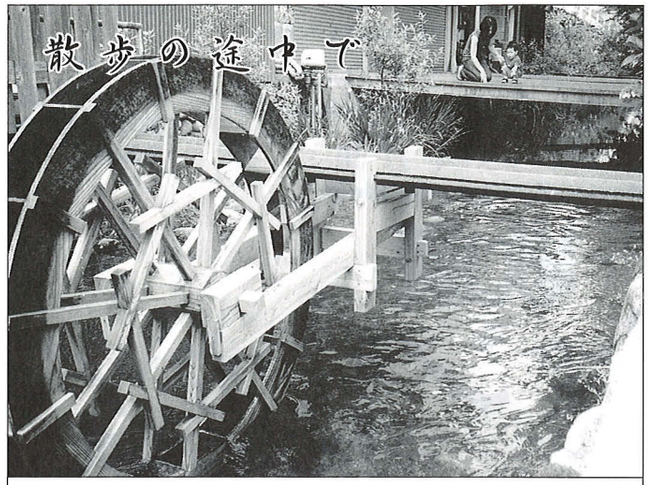
先日、今度は、そのネズミの雄が身震いするようなニュースが世界中を駆け巡った。マウスの雌が雄なしで子どもを作り、できた子どもは全部雌である、というニュースである。

動物の一生は、卵と精子が合体した受精卵という一つの細胞から始まる。受精卵は父と母から一揃いずつ、つまり二揃いの遺伝子を受け継いでいて、同じ働きを担当する遺伝子を二つずつ持っている。これら二つの遺伝子は、雄由来とか雌由来とかで差別されることなく、仲良く働くのが普通だが、ごく一部、雄マークや雌マーク（「刷り込み」という）をつけた遺伝子があり、発生のある段階では、どうしても特定のマークを持つ遺伝子が必要になることが最近分かってきた。つまり、卵の遺伝子だけ二揃いあっても、子どもは育たないのである。

そこで、遺伝子を操作して、卵の遺伝子に雄マークをつけ、この贋雄遺伝子を持つ卵の核と正常の卵を融合させて、見事に子どもを作ったという訳である。しかし、卵には雄作りに関係するY染色体がないので、生まれてくるのは雌だけである。

この「雄要らず」の実験、一見、雄の価値を否定したかに見えるが、実は逆である。第一、この実験は、雄マークの「有り難さ」を再認識させるものではないか。さらに、哺乳類では、雄なしでは雄が生めないことを、事実で証明したものでもある。

雌だけの世界など、考えるだけでもおぞましい。世の中、色々ある方がいい。形も、香りも、音も、考え方も、生き方も。「色々」が社会に潤いや弾力を与えてくれる。（路）



5月末、土佐電鉄の電停「蛍橋」近くの本宮川でホタルが見られるらしいと聞いて見に行った。「まさか、あの街中の小さな川で？」と半信半疑だったが、いくつもの光がゆっくりと点滅する幻想的な雰囲気を堪能した。近所の人たちがホタルを見ながらのんびりと世間話をしている様子にも、近ごろでは珍しくなった「夕涼み」とか「近所付き合い」といった風情を感じた。ホタルの季節は終わったが、木製の水車ができて、人が集まり、会話が生まれる憩いの場になっている。

風俗

世話役さんの繰言

南海地震に備えて、地域へ自主防災会をつくろう！　という運動が展開している。高知市でも町内会を基盤に団体の組織化が進んでいる。災害時の救助機器類（消火器、ハンマー、一輪車、担架、ハンドマイク、医薬品など）の無償貸与など行政の対応も懸命だ。

地震被害には限らない、火事、水害、防犯、などなど地域住民が自主的に住みよい町をつくろうとして活動を組織化することは大事なことだろう。当町も二百戸ほどの全世帯を会員とした防災会を結成、二年目を迎えた。

先日、年度替わりの定期総会を持ったのだが、予想していたとはいえ、参加者十名足らずという実態には頭を抱えた。津波被害が想定されない地域とはいえ、みなさんのこの反応ぶりには参った。公民館、町内会等にも見られる、地域運動に対する住民の意識の問題でもあるのだが、ボランティア活動に時間を割く、ということの難しさを改めて実感した。

具体的に何をやるか、何ができるか、暗中模索という執行ぶりにも問題はあるのだが、とにかく集まって話し合おう、その中から方針も見えてくる、といった姿勢は軽くいなされたようだ。幹部請負の運動は形ばかりになる、と思うので、情報紙発行にも意を用いてきた心算だが、みなさん、自分のことで精一杯、というのが実際かもしれない。世話役さんは今日も消耗しながら、懸命です。（3）

MUSEUM SHOP
Kochi-City Culture Plaza CUL-PORT

Original goods
Artist goods
Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動を続けている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田２－１
高知市文化プラザかるぽーと３階
Tell 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）
営業時間　10:00～18:00

今号の表紙

「夢幻 －MUGEN－」 門田卓也

夏の風物詩、花火。その色彩と迫力は多くの人を引きつける魅力があります。目で見たものとは異なる花火の生命を感じるように、花火のスパークする瞬間に独自のレンズワークを駆使して撮影してみました。生命体のような息吹を感じつつ・・・。

（かどたたくや）

文化高知 No.120 [隔月発行]
2004年(平成16年)7月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-5-14869

オペラ・オペレッタ クラシック ウィーン シリーズ 提供
Opera Operetta Classical Vienna Series

ウィーンの森 バーデン市立劇場
Operetten Metropole BADEN Stadttheater

モーツァルト 作曲
Mozart, Wolfgang Amadeus

モーツァルト最高傑作のひとつ

モーツァルト、ベートーヴェン、J.シュトラウスが愛し、多くの名曲を作曲した音楽の都バーデン。

歌劇 コシ・ファン・トゥッテ

Cosi fan tutte ―――「女はみんなこうしたもの」

伊語 全2幕
解説書 字幕スーパー付

明るいナポリの海辺で、美しい姉妹とまじめな士官たちが老学者と姉妹の小間使いに踊らされて繰り広げられる恋人たちの物語り。

高知市文化プラザかるぽーと開館3周年・(財)高知市文化振興事業団創立20周年記念事業

9/29(水)

開場▶18:00 開演▶18:30

料金(全席指定)

S 席	9,000円
A 席	8,000円
第2バルコニー席	5,000円
第3バルコニー席	4,000円
第4バルコニー席	3,000円

※身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名は、上記料金より3割引でご購入いただけます。

高知市文化プラザ大ホール

主 催:財団法人高知市文化振興事業団・高知新聞社
助 成:財団法人地域創造
後 援:オーストリア大使館・バーデン市・NHK高知放送局・RKC高知放送
KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・KCB高知ケーブルテレビ・エフエム高知

財団法人高知市文化振興事業団
お問い合わせ 088-883-5071 / 電話予約 088-883-5073
http://www.bunkaplaza.or.jp

■前売り券販売所
高知市文化プラザミュージアムショップ… 088-883-5052
高新プレイガイド…… 088-825-4335
高知大丸プレイガイド…… 088-825-2191
高知県民文化ホール…… 088-824-5321
高知県立美術館ミュージアムショップ…… 088-866-8118
※バルコニー席については高知市文化プラザでのみ販売いたします。
※未就学児童の入場はご遠慮下さい。

■通信販売
直接購入が出来ない方は通信販売をご利用下さい。必ず電話(088-883-5073)にてご予約の後、郵便振替口座[加入者名:(財)高知市文化振興事業団 口座番号:01680-5-14869]に公演名・券種を明記の上、チケットの合計金額と送料430円を合計した金額をご入金下さい。入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

http://www.bunkaplaza.or.jp　E-mail bunshin@i-kochi. or. jp